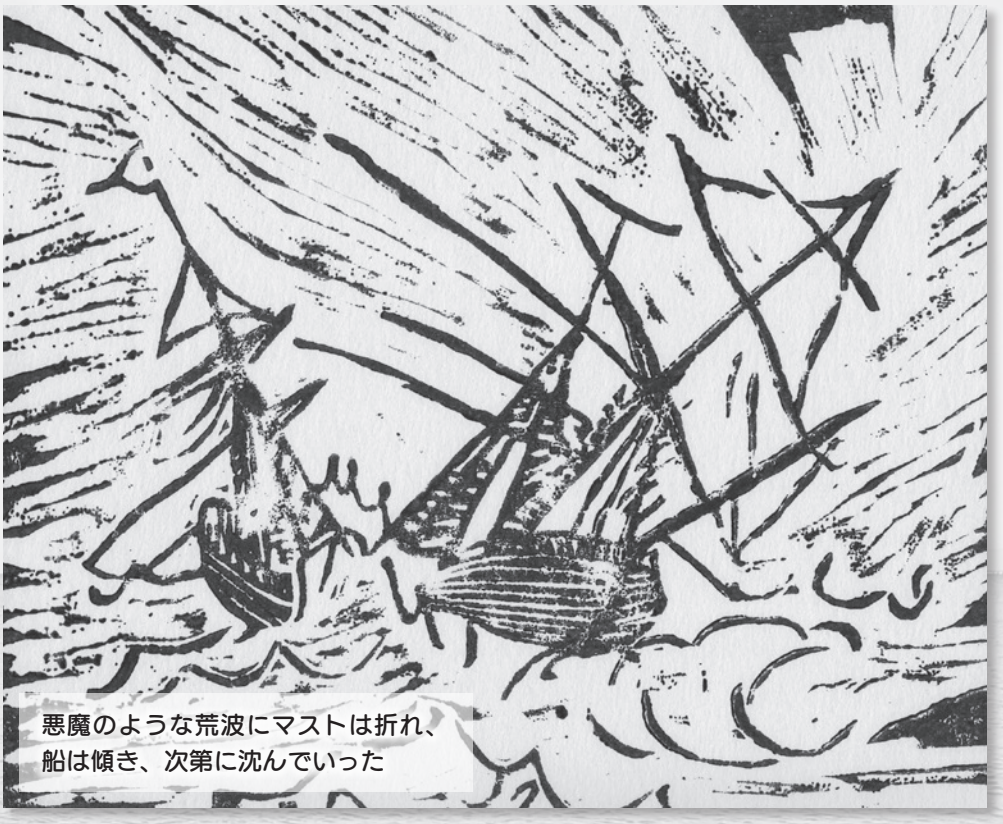
チェスボロー号遭難救助から130年

国境を越えた「勇気と愛」を語り継ぐ

明治22（1889）年10月30日、米国メーン州バス市船籍のチェスボロー号が、車力沖で座礁し転覆。船を発見した車力村民は、荒れ狂う海へ立ち向かい、23人中4人の船員を奇跡的に救助しました。遭難救助百周年にあたる平成2年から旧車力村とバス市の相互訪問交流が始まり、平成5年には姉妹都市協定を締結。その関係はつがる市にも引き継がれています。

出典：愛は海を越えて
（絵　松野　良子
文　岡部千鶴子
発行　市姉妹都市協会）



悪魔のような荒波にマストは折れ、船は傾き、次第に沈んでいった

米国船の遭難を県庁に知らせるため、村一番の健脚を争う鳴海寅吉と佐々木兵次郎が、64kmの道のりを9時間かけて走った

人目もはばからず自分の肌で乗組員を温める工藤はん。村人が見守る中、乗組員は静かに目を開く

村人は、当時とても貴重だった卵や鶏肉を、誰とも知らない外国人4人に惜しげもなく分けてあげた

両市民が出席のもと、慰霊祭を挙行

8月3日、牛潟町の高山小公園で「チェスボロー号遭難救助130周年慰霊祭」が開催され、市民およびバス市の訪問団ら約80人が、海に散った遭難者の霊を慰めました。

出席者全員で黙とうを捧げた後、両市長が慰霊碑に献花。神事に続いて福島市長は「国境を越えた勇気と愛で救助した史実を語り継ぐことが遭難者19人の御霊を慰めることであると信じ、築き上げてきた友好関係を確実に次世代に受け継いでいく」と慰霊の言葉を述べました。

今年は、バス市からピーター・オエン市長をはじめ13人がつがる市を訪問。オエン市長は「乗組員の救助に対し、バス市では今でも感謝の気持ちが絶えない。これからも素晴らしい姉妹都市交流を楽しみにしている」と語りました。

出席者全員が追悼の意を込めた風船を一斉に空に放った後、遭難救助130周年と相互交流30周年を記念して、関係者が公園の一角にハナミズキの苗を植樹しました。

慰霊碑に献花する両市長

追悼のバルーンリリース

ハナミズキを植樹